

お江戸日本橋

澁谷 繁樹



ことし四月十四日午後一時、二十二人の鹿児島県人が東京は品川の商店街を歩きだした。目指すは十五キ。先の日本橋。小さい時分、学生のところ、東京にいたけれども、一日で十キも歩くなんて経験はしちやいないだろう。酔っぱらい電車賃もなくて歩くしかなかった夜を幾晩も重ねた覚えは、今も褪せてはいませんがね。

そもその話は十二年前にさかのぼる。雨だった平成十八年の四月二日、鹿児島市の西田橋のたもとに薩摩街道保存会のメンメンが集合した。保存会は江戸時代の参勤交代の道を歩いてみようじゃないか、廃れた道なら探

しだして守ろうじゃないかを合言葉に結成された。江戸まで千五百キ、川のほとりの公園で、トイレの庇を借りて雨を避けながら、昔の人はよくもまあ歩いたもんだと感心しきりだったのを覚えている。

江戸の薩摩人がどれだけ健脚だったか、一八一九（文政二）年の記録を見てみよう。

出発は八月五日・伊集院泊、六日・湯田泊、七日・阿久根泊、八日・米ノ津泊、九日・佐敷泊、十日・日奈久泊、十一日・川尻泊、十二日・山鹿泊、十三日・拜犬塚泊、十四日・山家泊、十五日・木尾之瀬泊、十六日・小倉泊、十七日・乗船、十八日・下関港泊、十九日・出船。

九州四百キを二週間もかからずに踏破している。道中足袋に草鞋で一日にはぼ四十キ。一度、数寄人が装束も往時のまま挑戦してみただけでも一キも歩けなかった。健脚は足の

裏が厚くて達者でない」と成立しない。

二十日・新泊り港泊、二十一日・上之関泊、
二十二日・湯之こ泊、二十三日・ういの津泊、
二十四日・小湊泊、二十五日・岩木泊、二十
六日・ひびの港泊、二十七日・むろの港泊、
二十八日・明石泊、二十九日・兵庫泊。

旧暦は九月に入る。一日・兵庫泊、二日・
船中、三日・大阪泊、四日・大阪泊、五日・
草津泊、六日・大山泊、七日・四日市泊、八
日・佐屋泊、九日・鯉鮒之町泊、十日・二川
泊、十一日・見府之町泊、十二日・大井川泊、
十三日・府中之町泊、十四日・由比泊、十五
日・由比泊、十六日・三島泊、十七日・小田
原泊、十八日・戸塚泊、十九日・江戸到着。
船足も入るとはいえ、基本は徒歩、四十日
とちよつとで江戸は白金の薩摩藩下屋敷に入
っている。現在で言うところ、東京都港区白金台

一丁目、白金小学校あたりの約八千坪。

記録（道之記）を残してくれた薩摩藩高城
郷湯田村生まれの医者・桐原種徳は「早くも
白金の南の御門に着いた。君（島津重豪）は
御籠から地面におみ足をおろし御門をお通り
になる。うれしいつたらないじゃないか。万
歳、万歳だ」と喜んでいる。

桐原さんは出発日の八月五日に書いている。
「水上坂下の茶屋で休足（休息ではなくて休
足。足を休ませる感じがよく出ているな）。親
類からご馳走をふるまわれて再び出立。にわ
かに雨が降り出した」。

保存会の門出の日も雨だった。江戸人には
比べるべくもない足弱の現代人が、同じ雨の
日に歩き出して、はるばる江戸は日本橋まで
どうやってたどり着いたか。それはね。ちよ
うどお時間となりました。またの機会に譲り
ましょう。

（元新聞記者、薩摩街道保存会顧問）



江戸時代の橋です 日本橋も同じ作りだったでしょう (江戸東京博物館)



大名屋敷の一つ 落語「井戸の茶碗」で高木作左衛門がゴミ屋さんに声をかけるのが堀に見えている御窓 道は御窓下になります (江戸東京博物館)



大名籠 見た目重視で乗り心地の方はねえ (江戸東京博物館)



ご存知の二八そば屋台 担ぐとズシリと来る重さです (江戸東京博物館)